司会の言葉

村山正博*，伊東春樹**

「運動療法で心機能は良くなるか」は谷口興一会長の発案であるが，なかなか挑戦的なタイトルである．どんな治療法にでもいえることであるが，適応と使い方によって答は「yes」でもあり，「no」でもある．それが判っていながら，敢えてこのようなタイトルが付けられたのは，従来，運動療法の効果は必ずしも切れ味の鋭いものではなく，その効果を疑問視する向きもあったからである．しかし，最近になってようやくその効果と機序に関する学問的根拠がいくつか示されるようになり，また高齢化社会に向けてQOL重視の風潮と相まって運動療法への関心が急速に高まってきたことが，このテーマを大きくクローズアップしている所以である．このことは，昨年の4月「運動療法の保険点数加算の改訂」につながり，これにより広く国民医療の場においても運動療法の効果が公的に認知されたといっても良い．

しかし，その詳細な機序解明や明確な適応基準の提示には未だ多くの問題が残されている．本シンポジウムのタイトルの問いかけをもう少し具体的に詰めて行くと，「改善される心機能は何で評価するか」，「運動療法の機序は心筋自体に対する直接作用か骨格筋に対する効果を介する間接作用か」，「どのような心疾患に，どのような運動療法が有効か」という問題に分けられる．

運動療法の効果は，心臓自体の中枢効果か骨格筋に対する末梢効果が主なものかという議論は古くからあり，従来は後者であるというのが定説であった．最近，本シンポジウムでも報告があるように，心筋灌流そのもの改善がもたらされるという証拠がいくつも出され，新しい展開を見ていることに着目して頂きたい．また，従来，虚血性心疾患の適応では主に急性心筋梗塞の回復期リハビリテーション期にあったのが，最近はPTCAや冠動脈バイパス術後など新しい治療法後の運動療法への拡大に至っていること，また，かっては運動療法の適応とならなかった心不全に対してもその効果が認められるようになったことも知って頂きたい．さらに，会長の強い要望もあり，米国における心臓移植患者の運動療法の実態と機序も紹介される．

運動療法に関する議論がなかなか理解され難いのは，施設によって運動療法の効果を判定する指標が異なること，運動負荷試験の方法や判定が統一されていないこと，さらに運動療法の具体的方法即ち運動処方が異なることなどが挙げられる．本学会は，運動療法の専門家の集まりではないことを考慮して，本シンポジウムではそれぞれの演者にそのことを意識した解説を最初に述べることを依頼した．統一されていない運動処方や運動負荷試験指標に苛立たしさを覚えれる向きもあろうが，議論の中から本質的な問題を見つけて頂ければ幸甚である．

*聖マリアンナ医科大学第二内科
**心臓血管研究所

Presented by Medical*Online